

Title	アフガニスタンに関する講演及び展覧會
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.1 (1933. 4) ,p.157- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

置かせ給へり。つぎに上段は之れにつゞきて一段低く、一間半に六間半、下段は九間四面百六十二疊敷の大廣間にして室内や、暗けれど、却つて豪宕華麗に一層の深みを添へ、前方には板張りの廣椽、左側には疊敷の縁座敷を附したるは藤原時代の寢殿造、廂の間の遺風にして桃山時代書院造の一特色なり。その床の間の繪畫は「張良引四鶴謁惠帝圖」にして、右方張臺構の「武帝會西王母圖」と共に狩野探幽畢生の大作なり。今之れを以て二條城の謁見の間に比する時その豪壯華麗更に一層大なるものあるを感ぜざるを得ず。眞に一代の英雄秀吉の面目を偲ばしむ。吾等は下段の下座に靜座してしばし封建桃山の幻想を畫き、豊臣氏の末路を偲びて感極まれり。

御影堂を一巡し寺の東南隅なる滴翠園に至る。同園は清楚閑寂にして雅致に富み、當に天下の名園なり。之れ亦豊太閤聚樂第の遺構にして、世の嘆賞措かざるところなり。就中著名なるは飛雲閣と黃鶴臺なり。飛雲閣は金閣・銀閣と並び世に所謂三名閣の一なるもその構造は最も複雑にて上層は實形造、中層は寄棟と軒唐破風造、下層は入母屋切妻と軒唐破風造をなし外見上三層の如きも、内部は四層をなせり。初層には徒歩にて來る人に對する玄關なく、「お船入」と稱し、船より石階を登り直ちに座敷に上る仕組となれり。之れを船入の間といふ。その他柳の間・八景の間・茶室等あり。中層は二段となり、歌仙の間といふ。四面の表裏に畫かれし三十六歌仙の圖は狩野山樂の筆なりといふ。上層二間四方にて摘星樓といふ。

樓を下り、柳の間より廻廊をつたひ黃鶴臺に至る。こゝには蒸

風呂の遺構あり。聚樂第の湯殿をその儘移せしものにして、三室よりなり。その中二階は脱衣場にして淡彩壁畫を描けり。室の正面は池に面し、浴後涼をとるに適せり。その後方に控室、その奥に浴室あり。浴室は南北二間半東西三間、その左寄に置かれたる向唐破風造家形の箱は即ち古へのまゝの蒸風呂なり。園の東北隅、滄浪池に臨み鐘樓あり。その梵鐘は洛西太素廣隆寺の古物にて、少納言信西の銘あり。現に國寶たり。

更に勅使門を見る。一に日暮門として有名なり。此門は伏見桃山城の遺構にしてその規模裝飾の豪宕華麗なる眞に日暮門の名に背かず。

巡覽こゝに一時間半、四時三十分、西本願寺を辭し、かくて五日四晩に互る見學旅行を無事終了せり。乃ち一行は五時半、圓山なる平野屋に集まりて最後の晚餐を共にし、こゝにこの見學團を解散せり。願れば今次の旅行は幸に天候に恵まれ、愉快に實地研學の効果を擧げ、大いに史實を肥すを得たりしは、我等の本懐とするところなり。最後に旅行前、種々の指導を賜はりし伊木先生を始め、各地に於て吾等一行の便宜を計られし諸賢に對し厚く感謝の意を表す。(横田實記)

アフガニスタンに關する講演 及び展覽會

本塾文學部は、本年一月廿六日日佛會館學長として滯京中のジ

ジョゼフ・アッカシ Joseph Hakin 氏を聘して、大講堂に於てアフガニスタンに關する一場の講話を請ふた。アッカシ氏は、チベット・中亞・印度方面の佛教美術の専門學者として著名であり、在來多くの著書論文を公刊されてをる（同氏の著作目録に就ては民俗學八年二月號一四四・一四五頁並び四月號參照）。つとに巴里ギメー博物館々長として令名あつたが一九二四年以來アフガニスタンの佛國考古學派遣團に加り多くの寄與を學界に齎して居る。一體アフガニスタンは從來領國主義をとり、外人の國內旅行甚だ困難であつたが、一九二一年佛國考古學者に對し爾後三十年間國內の自由なる調査發掘を許可したのである、最初の佛國派遣團の隊長たる大任を帶び同國に入つたのは、かのガンダーラ藝術の研究者として著名なるフーシエ氏である（註一）從來ガンダーラ式藝術がアフガニスタンを經て中央アジアに榮え、ついに極東に及びしことは、印度及び中亞の研究によつて明かにせられたが、たゞ中間のアフガニスタンのみ鎖國のため調査未了であり、その寶庫の開かれんことを各國學界は、久しく待望してゐたのである。フーシエ氏は、翌年ゴダル氏と合し、アフガニスタンの考古學的豫察を開始した。大夏（バクトリア）の舊都であつたバルクの發掘には成功しなかつたがハッダの寺院址に於て多くのスチユッコ（漆灰）製の佛像其他の彫刻に明瞭にギリシアの影響を帶びたるもの多數を發見した。最初の發掘品は不幸回教の狂熱的信徒たる住民の手により破壊せられたが一九二六年ベルツィ氏により再びハッダの發掘は繼續せられ、その將來品は今日巴里チエルヌスキ、ギメーアフガニスタンのカプールの諸博物館を飾りその一部は日本にも

將來せられ、京大・東大・城大等のミュージーを飾つてをる。アッカシ氏は、一九二四年に、アフガニスタンに來り、諸所調査を開始し、ことにゴダル氏夫妻と共にパーミヤーン（梵衍那）を問ひ、その石窟寺を調査した。パーミヤーンは、中亞と印度間で隊商の中繼所として古來より重要な地點であり、その狹長な平原に臨む礫岩の岩壁には無數の佛龕が鑿掘され、殊にその大佛像は、七世紀に此地を通過せる玄奘の西域記にも錄せられて極めて著名である。ゴダル、アッカシ氏は、是等佛龕の上層に存せる壁畫の殘存を忠實に模寫調査して學界に紹介した。此壁畫は、印度のアジャンタと中亞の壁畫との中間に於て始めて發見せられた遺物で單にガンダーラ繪畫の唯一の名残りなるのみならず二世紀より八世紀初半までの印度式、ペルシア・サッサン式、支那式等の手法を傳へ、當時の諸流派を研究する上に極めて興味ある一大資料群である。アッカシ氏は、カール氏を伴ひ、更に第二回の踏査旅行を一九二九年に企て折柄の革命により國內争亂の甚なりしにも關らず東ペルシアの險路を通過して敢然アフガニスタンに入國し、革命中代理公使の役を演じ、ナディル・シャーの登極を見るや此聰明なる國王の庇護により一九三〇年再び其調査をパーミヤーン及びその附近に開始し、殊にパーミヤーンではその斷岸の下に埋没せる古代石窟を發掘し、壁畫・彫刻と共に紀元三世紀に廻る梵語文書等を發見した。この第二回踏査によりパーミヤーンの藝術には三世紀頃印度と共にギリシアの影響強くあらはれ、ついで四世紀頃ペルシアの影響最高潮に達し、後に新疆庫車に榮えたるイラン式佛教藝術の淵源は此地方に發することを證明した。更にパーミヤ

ーンを去る數キロメートルの地點カクラクに於て五世紀頃の壁畫
發見され、その中亞藝術との關係愈々密接なることが確められ
た。アツカン氏は、カール氏を伴ひ此調査を終えてから日佛會館
學長として一九三〇年日本に赴任したが、翌三一年より三二年に
かけ、シトロエン會社の中央アジア横斷旅行に参加し、ペーミヤ
ーン藝術と中央アジア藝術との比較考究をなし、各遺跡の多くの
壁畫寫眞を撮影して歸來し、西域考古學上多大の功獻をなした(別
稿記事参照)。

日本にあつてアツカン氏は、諸所でその調査結果に就て講演さ
れる所あつたがその中アフガニスタンに關する講演は左の通りで
ある。

昭和六年一月廿七日 アフガニスタンに於ける考古學的發掘

(日佛會館)

七年五月廿七日、五月卅一日

ペーミヤーン(アフガニスタン)の佛教藝術と其中央亞細亞
との關係(東大)(註二)

六月十三日、十四日 同演題(京大)

十月十五、十六日 同演題(城大)

十一月十五日、十二月十三日、十二月廿日、昭和八年一月卅一

日 アフガニスタンに於ける佛蘭西考古學委員の作業(日佛

會館)(註三)

十二月十四日 アフガニスタンの歴史(アテネ・フランセ)

昭和八年一月廿五日 アフガニスタンの佛教藝術に及ぼせるイ

ラン(波斯)文化の影響(アヂアチック・ソサイテイ)

二月十二日 印度西北部の佛教藝術に及ぼせるギリシア文化の
影響(關西日佛學館)

二月十八日 アフガニスタンの佛教藝術に及ぼせるギリシア及

びイラン(波斯)文化の影響(九大)

二月廿七日 ペーミヤーン及びその地方の佛教美術に於けるイ

ランの影響の問題(東洋文庫)

三月二日 佛教美術に及ぼせる希臘影響(明治聖德記念學會)

一月廿六日氏が本塾に於てされた講演は *J. Alghunishur, Es-*

quisse Historique et ethnographique 「アフガニスタン、その歴

史的、人種誌的要略」と題し、十八世紀以降のアフガニスタンの政

治史、北より南下するロシアと印度西北の關門を支配せんとする

英國の北進との間にはさまれて如何に其國境が特殊的な形體をと

るに至つたか、アフガニスタンの人種が日本と正反對に極めて統

一を缺き、ドラニ・ギルツアイ二族の對立以外ハザラと云ふ蒙古

人の遺裔山地に住すること、この好戰的な臣民を擁し、英露二大

勢力の間の中立地帯たる觀ある現アフガニスタンに君臨するナデ

イル・シャーは銳意經濟的勢力を増進して眞に實力ある國家とな

さんと勉めつゝあると云ふことに就て極めて興味ある説明をされ

た。氏としては初めての通譯附講演であり、かつ講堂の寒冷なり

したため、豫定程長く講演せられなかつた感があるが、幻燈を利用

しての懇切なる説明によつて聴衆は身その境にある思ひあり多大

の感銘を與へられた。氏は目下 *Recherches sociologiques sur*

les tribus afghanes なる著書の起草中であり、本講演に述べら

れしことは、本書によつてなほ敷衍されることと信ずる。

三田史學會は、本講演と關係して廿五、廿六の兩日本國圖書館
 紀念室内にアフガニスタンに關する圖書寫真等を陳列して觀覽を
 供した。急遽思ひ立つた企てであり、多くを整理するに至らな
 ったがアフガニスタンに於ける最近の發掘、その中間との關係、
 アフガニスタンを通過せる旅行者の記録、ハンニブ、中間、回教
 藝術等に關する書籍資料を陳列して會期中多くの來會者を集め多
 大の成功を博するを得た。

今その出品の目錄一部を記すれば左の如くである。
 ハンカン氏出品圖書

Sr. Keith A, Jackson Barr, Views in Affghannistann &c.
 &c. &c. from Sketches taken during the Campaign of the
 Army of the Indus, London, 1839.

Richard Harlly Kennedy, M. D., Narrative of the Cam-
 paign of the Army of the Indus, in Sind and Kanbool,
 in 1838—9. London 1840.

Charles Masson, Esq., Narrative of various journeys in
 Balochistan, Afghanistan, and the Panjab; including a
 residence in those countries from 1826 to 1838, in three
 volumes, London, 1842.

J. H. Stocquerel, Memorials of Affghanistan: being state
 papers, official documents, dispatches, authentic narra-
 tives, etc. illustrative of the British expedition to, and
 occupation of Affghanistan and Seind, between the years
 1838 and 1842. Calcutta, 1843.

J. P. Ferrier, History of the Afghans, translated from the
 original unpublished manuscript by Captain William Jes-
 se, London, 1858.

H. W. Pellow, Journal of a political mission to Afghanis-
 tan, in 1857, under Major (Now Colonel) Lumsden; with
 an account of the country and people, London, 1862.

H. W. Pellow, From the Indus to the Tigris, a narrative
 of a journey through the countries of Balochistan, Af-
 ghanistan, Khorassan and Iran, in 1872, together with
 a synoptical grammar and vocabulary of the Brahoe lan-
 guage, London, 1874.

Major C. E. Yates, Northern Afghanistan or letters from
 the Afghan boundary commission, Edinburgh and Lon-
 don, 1888.

Imperial Gazetteer of India, North-West Frontier Provin-
 ce, Provincial Series, Calcutta, 1908.

G. P. Tate, the Kingdom of Afghanistan, a historical sket-
 ch, London, 1911.

Lt. General Sir George Macnunn, Afghanistan from Dari-
 us to Amanullah, London, 1929.

Afghanistan in the melting pot, Lahore, 1930. (by C. Mar-
 rish ?)

匣式田田譯
 一、ハンカリスカムのハンムスキタイ及び安南の實地

- 一、カンダールの Ahmed Shah Dourani の墓
 - 一、カンダール Tesehel Zineh
 - 一、ガズニに於けるサルタン・アブドル・レサクのモスク
 - 一、ガズニ・マームードの墳墓
 - 一、ガズニに於けるマームードの勝利記念碑
 - 一、Dauletzai の種族
 - 一、Mulkur Alkheh 族のダンス (外二枚)
 - 一、パーミヤーンの溪谷 (外二枚)
 - 一、大佛陀の頭上より撮りたるパーミヤーンの溪谷
 - 一、ベルク (バクトル) Tofe-i-Rustam
 - 一、現國王ナディールシャーとシトロロモン中亞横断旅行團
- 尾高鮮之助氏出品寫眞
- 一、パーミヤーン宿院全景 (三枚)
 - 一、パーミヤーン大佛像高五三米 (二枚)
 - 一、同小佛像高卅五米 (二枚)
 - 一、パーミヤーン宿泊所外部及び内部 (二枚)
 - 一、ハッダ彫刻
 - 一、カプール博物館外部及び内部 (二枚)
 - 一、アフガニスタンと印度の國境
- 保坂三郎氏出品寫眞
- 一、ハッダ佛頭 (二枚)
 - 一、ガンダール釋迦牟尼佛立像頭部
 - 一、ガンダール佛降誕
 - 一、大谷ミツシヨーン中亞將來壁畫の斷片

居城基氏出品

- 一、カール氏筆油繪、パーミヤーン風景
- 井上恒一氏出品

一、十四五世紀の波斯陶器、外回教藝術に關する書籍二冊
内藤智秀氏出品

アフガニスタンの壁畫、外回教藝術に關する書籍三冊

本塾圖書館及び其他出品圖書目錄の一部

J. Haekin, Les Scènes figurées de la vie du Buddha d'après des peintures tibétaines (Mémoires concernant l'Asie Orientale, Tome 2 Paris, 1916.)

Asie Centrale et Tibet, Mission Pelliot et Bacot (Bulletin Archéologique du Musée Guimet, Fasc. 2, 1921)

J. Haekin, Guide-Catalogue du Musée Guimet, Les collections bouddhiques, Paris, 1923.

Exposition de récentes découvertes et de récents travaux archéologiques en Afghanistan et en Chine, Musée Guimet, 1925.

Haekin, etc. tr. by Atkinson, Asiatic Mythology, a detailed description and explanation of the mythologies of all the great nations of Asia, London, 1932.

A. Godard, Y. Godard, J. Haekin, Les Antiquités bouddhiques de Bamian, Paris, 1928.

J. Haekin, La Sculpture indienne et tibétaine au Musée Guimet, Paris 1931.

J. - J. Barthoux, Les Fouilles de Hadda, Paris, 1931.

the Hon. M. G. Talbot, The Rock-out caves and statues of

Bamian (J. R. A. S. vol. 18, Part 3, 1886)

S. Lévi, Notes sur des manuscrits sanscrits provenant de Ba-

miyan et de Gilgit (J. A., CCXX, No. 1, 1932)

Philip F. Walker, Afghanistan : its history and our dealings

with it. 2 vols, London, 1885.

Lieutenant A. C. Yele, Travels with the Afghan Boundary

Commission, Edinburgh and London, 1888.

Archibald Forbes, the Afghan Wars (1839—42 & 1878—80),

London, 1892.

E. F. Knight, Where three empires meet, A narrative of re-

cent travel in Kashmir, Western Tibet, Gilgit, and the a-

djoining countries, London, 1894.

Sir George Scott Robertson, the Kafir of the Hindu-Kush,

London, 1896.

le Prince Louis d'Orléans et Bragança, A travers l'Hindo-Ku-

sh, Paris, 1906.

Dr. Rouire, La Rivalité Anglo-Russe au XIXe siècle en

Asie, Paris, 1908.

Commandant de Bouillane de Lacoste, Autour de l'Afghanis-

tan, Paris, 1908.

René Grousset, Sur les traces du Bouddha, Paris, 1929.

René Grousset, Travaux français en Iran (Revue de Paris,

15 Juin 1932)

亞富汗斯坦地誌(陸軍文庫)引田利章編 明治十八年八月

亞富汗斯坦 田鍋安之助編(東亞同文會發行)昭和五年七月

世界風俗大系七卷西亞篇(新光社)昭和五年

世界現狀大觀 新興國篇回々教國アフガニスタン(米田實)昭

和六年七月

(以下は略す)

アッカン氏の出品は、全部の藏書でなく、一部は既に佛國に送り返した後なので氏は之を遺憾とされてゐたが、此方面の書籍は、あまり從來日本で注意されてゐなかつたので頗る有益な出品であつた。また尾高氏は、刀江書院の豐作氏の令弟であり、昨年アフガニスタンに入つて將來した貴重な寫眞を本會の爲快く貸與せられたことは深く感謝に堪えない。なほ氏は黒田美術研究所にあり、此方面の美術史家としてその將來を囑望されてゐたが最近不歸の客となられたのは斯界のためかへすがへすも遺憾である。

註一・フーシエ氏は、アフガニスタンの歸途日本を訪問し、本巻でも講演された。同氏著日佛會館發行「佛教美術研究」(昭和三年)参照。

註二・此講演概要を氏は、譯して出版配布せられた「Bamiyan (アフガニスタン)の佛教藝術とその中央亞細亞との關係」

註三・會館に於ける講演は「L'Œuvre de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan (1922—1932) I. Archéologie bouddhique, Par J. Hackin, Tokyo, 1933. 201p

出版された。たゞし非賣品であるのは残念である。その第一章は吉川逸治氏が譯して美術研究に發表されるところである。